

# 『市川の伝承民話』における「世間話」「生活譚」再考

—市川市国府台周辺の「軍隊にまつわる話」を通して—

根岸 英之

## はじめに

千葉県市川市を終焉の地とした文豪永井荷風は、その日記『断腸亭日乘』の昭和十六年六月十八日の条で、「町の噂」として次のような噂を記している。<sup>(1)</sup>

「ある兵士が精神に異状を来し」やがて市川の陸軍精神病院に送らるゝに至りしと云。市川の病院には目下三四万人の狂人収容せられ居る由。」

市川市国府台には、明治十八年から昭和二十年まで陸軍の施設があり、国府台周辺の人々は、そうした軍の施設と関わりながら、生活を送ってきた。現在の和洋女子大学を始めとする学園群は、この陸軍施設の跡地に建てられた施設である。<sup>(2)</sup>

## 一 調査結果の概要

発表者の所属する「市川民話の会」は、一九七八（昭和五十三）年一月に市内の小・中学校に勤務する教職員が中心となって発足した市民団体で、市内の口承文芸調査の成果を、市川市教

育委員会発行による『市川の伝承民話』として不定期に刊行してきた。一九九七年から九八年にかけては、国府台周辺の口承文芸調査を行い、その成果は、『市川の伝承民話第8集』（二〇〇四・五市川民話の会 A5版 198ページ）として資料集化した。この国府台周辺の調査では、「軍隊にまつわる話」を多くつかがうことができた。そのため、資料集の冒頭に、「軍隊にまつわる話」という章立てを行い、これらの話をまとめて報告する形を探った。こうした話は、従来の口承文芸の枠組みでは、あまり主題化されてこなかつた話群ということができる。

本稿では、「軍隊にまつわる話」という設定をすることで、どのような口承文芸研究の課題が見出せるのかを考えてみたい。

が、活動を重ねる中で、会員の知り合いをたどり、「聞ける方から聞ける話を聞く」という方法になつてきている。また、会の中では、口承文芸の『昔話』「伝説」「世間話」といった学術的な意味での分類や、『日本昔話大成』『日本昔話通観』のような話型分類なども、ほとんど意識化されることはない。

そして、「民話」というイメージを、漠然と「地域」に伝わる話」と捉え、さらには、今の内に聞いておかないと忘れられてしまふ（ちょっと昔）の市川の生活やくらしの様子など、いわば「地域」を伝える話」も聞いておきたいという動機で参加されるいふ会員が多い印象を受ける。

今回の国府台周辺の調査も、その地域の主だつた話者を探して、系統的に話を聞いたというよりも、会員の日常的なつての中で出会えた方から聞けた話を資料化した形になつていて。

話して下さつた方は、明治四十五年生まれから昭和七年生まれの男女五名。話者宅や会員宅で複数の会員が同席する中で伺つた。会員が分担してテープ起こしたものと、発表者が編集し資料集としてまとめていた。

その過程で、今回の資料は、「軍隊にまつわる話」が多く聞かれ、それが地域の特徴的な話と見なされたため、資料集の冒頭に、「軍隊にまつわる話」という章を立て、それらの話をまとめてみた。全体の構成は以下の通り。

## I 軍隊にまつわる話 本調査地区の特徴的な話として、軍隊にまつわる話を、地区別に分けて配列

- |     |  |
|-----|--|
| II  | 世間話 生活空間に起つた奇事異聞を中心とした話                |
| III | 伝説 地名や歴史的・信仰的な事物にまつわる話                 |
| IV  | 昔話 昔話を、「本格昔話」「いんねえのじゅえむどん（笑い話）」に分けて資料化 |
| V   | 唄・謡 韻律的な資料                             |
| VI  | 年中行事 地区別に暦順                            |
| VII | 生活譚 生活に関する苦労話的話題や地域の暮らしぶりがうかがえる話       |
- 「軍隊にまつわる話」としてまとめた話は、以下の話である。
- 1 国府台にあつた軍隊 (1) ~ (3)
  - 2 軍事病院
  - 3 時計のいらぬ国府台
  - 4 兵隊さんのかけ声
  - 5 国府台の歩哨の怪談と銃剣
  - 6 歩哨の日よけいちょう
  - 7 一中の桜
  - 8 戦車が崖に落ちたこと (1) ~ (2)
  - 9 国府台の連隊のパート仕事
  - 10 田中酒店
  - 11 共同墓地の慰靈塔
  - 12 軍隊から帰つてお墓に謝つたこと
  - 13 三匹獅子舞を受けると長生きしない

- 14 将校さんと星一つ  
今日は何の日だ
- 15 兵隊さんと結婚した人
- 16 軍人さんへ行儀見習い
- 17 旅団坂と五十円坂
- 18 国府台高校の怪談
- 19 根本のカフェ街（1）～（2）
- 20 カフェエと縁日
- 21 東練兵場
- 22 練兵場の見張り役
- 23 練兵場の排水
- 24 練兵場で遊んだこと
- 25 射撃場
- 26 農業要員で丘隊に行かなかつたこと
- 27 佐倉連隊の怪談
- 28 「1 国府台にあつた軍隊」「2 軍事病院」などの話は、「和洋の学校の建つ前は、騎砲兵大隊や高射砲隊や野戦重砲があつた」「軍事病院があつた」といったような、軍隊の概要について話されたものである。必ずしも、〈口承〉という形でなくとも、歴史記録などをひもとけば確認できるような内容ではある。しかし、「土手で囲まれちゃつてるから、中へ入らないと、中隊

## 二 軍隊にまつわる話の具体例

の建物の中の様子は分かりませんね」と話されるように、一般の人は見ることのできない中の様子が、「回想」による〈口承〉という回路で表出されたものであるということができる。

「8 戰車が崖に落ちたこと」は、「国府台に移つていらしてからの、いろいろおハナシ、ありますかしら?」という調査者の質問を受けて、「国府台はね軍隊があつて、まあ死んだり生きたり、いろいろありましたねえ」と前置きしてから、「国府台の寺の左側の崖に戰車（大砲の牽引車）が落ち、丘隊が五六人亡くなつた。その供養碑が寺に建つてある」と話されたもの。国府台に古くから住む者たちには、記憶に残る大事件だったようで、何人もの口から伺うことのできる話である。どんな〈ハナシ〉が聞けるかを探ることで、その地域の人人がどんな出来事に興味を持つてきたのかが分かる資料だといえる。

「22 東練兵場」から「26 射撃場」は、国府台の東の中国分というところに練兵場があり、当時の子どもたちの格好の遊び場になつていたことを語る思い出話である。このような〈思い出話〉も、多くの方から聞くことができ、その地域の人々にとつて、どんな出来事が記憶に残るものだつたかが分かる資料といえる。

「9 国府台の連隊のパート仕事」「10 田中酒店」「12 軍隊から帰つてお墓に謝つたこと」「17 軍人さんへ行儀見習い」「27 農業要員で丘隊に行かなかつたこと」などは、話者の〈ライフヒストリー〉という〈口承〉の話の中に、軍隊と地域との関わりがうかがえる資料となつていて。

「20 根本のカフェ街」「21 カフェ工と緑日」は、軍隊相手のカフェの賑わいを語る思い出話だが、「看板までいると女給さんと一緒にぶらつけるのでついつい夜更かしをしてしまう」という

次のような語り口は、全国から似たような話を集めて話型研究をするというような話柄ではないが、こういう〈思い出話〉の語り口に光を当てることは、□承文芸研究の重要な側面だといえよう。

あのう、「看板なれば、あのう送つてくから、もう少しいなさいよ」なんてゆうと（笑い）、国府台のほうの連中はねえ、ついつい時計見ながらねえ、遅くなんの分かつていいといて、夜ふかしちやうんですよねえ。

へえで（それで）あのう、十二時すぎてくんともう看板なって、のうれん（のれん）下ろすとね、で女たちが、あのエプロン自分たちのやつもはずしてね、普通の日本の着物ですからね、あのう着物姿んなって、それで根本の坂あがつて。で今の和洋女子の、あの門の入口辺り、あの辺までね、こうあの雑談したり、あの流行歌歌いながら。あのうそれは陽気のいい頃。うんあのう秋だとかねえ、春先のね。それから初夏の頃にね。で初夏のころなんかあそこ坂上がつてきて練兵場（れんぺいじょう）（今の国府台病院辺り）の、和洋の前ちょっとこうつつ立つて練兵場のほうのぞくと、もうなんともいえない。それで、満月にでもぶつかってごらんなさいよ。とても、こんな世界があんかなと思うほどね、いい所なんですよね。で

半分、あのう草でもつて芝でしょ。

「6 歩哨の日よけいちょう」は、「暑いさかり、歩哨が脳しんとうを起こして倒れてしまい、それを見た将校の申し送りによって、日よけいちょうが植えられ、それが今でも学校の校門のところに残っている」という話。冒頭に「主人が聞いて来たハナシなんですけど」と話されるように、このエピソードは、国府台の人の間で、〈ハナシ〉として伝えられていた様子がつかがえる。思いやりのある将校の〈美談〉としても、あるいは木のイワレを説く伝説的なハナシとしても受け止めることができる。いずれにしても、記録に値する〈□承文芸〉資料であると見なした。

「3 時計のいらぬ国府台」は、「朝夕に軍隊ラッパが鳴り渡るので、国府台には時計がいらぬ」と語られる話である。興味深いのは、ラッパの音を聞きなしていたことである。

「おきるよおきるよみんなおきる  
おきないと連隊長にしかられるー」（起床ラッパ）

「トコトツテ、ションベンタインテネー」（消灯ラッパ）

資料集では、これらを採譜とともに報告したが、こうした軍隊ラッパの聞きなしを研究することも、面白い課題といえよう。

「5 国府台の歩哨の怪談と銃剣」「18 国府台高校の怪談」「28 佐倉連隊の怪談」は、軍隊にまつわる〈怪談話〉。「4

兵隊さんのかけ声」「15 今日は何の日だ」などは、兵隊につわる〈笑い話〉である。

「13 三匹獅子舞を受けると長生きしない」は、「かつて国府台の祭礼に奉納されていた三匹獅子舞の猿をやると長生きしない」と言い伝えられていることが話された後、「そしたところが、大工さんとの、W（原話苗字）さんがやつて、あのうあんな死に方したでしょ、知つてんでしょ？」といつて、大工さんが、中国へ召集され、激しい戦闘の末、亡くなつた様子が語られたものの資料化。「知つてんでしょ？」という発話から、〈ハナシ〉として取りざたされていたであろうことが想像される。

水つたまりの中へ、足付け腰付けたまんまでもつて、いくんちか、やつて、後ろからあの食事を送るにも、今だつたらビニールがなんかの袋入れてねえ、んであのう池の中へと落つぼろうがどこへであろうが、あのやつて、そのころは、新聞紙をねえ、あの幾重（いくえ）にもあのこう書いて、そいであのう、ゴムバンドももうやつたわけでもないんでしようねえ。

（略）それであのう急いで（で）ね広（しろ）げないとね、新聞で中へ水しみちやうんですね。でもう広げると広げ終わつたとたんに、中のおにぎりがくずれたつてゆつてましたよ。でそれをくずれねもつたいいからね、もう口へ持つてつてね口でもつて、飲み込みようにしてねあの食べたつて。そうゆうふうな戦況なんですよ。

だからあ、あのうクリーク陵線（りょうせん）でゆうとあの、土手ですよね。陵線へ行つて、「顔出しちゃいけないぞ」つ

てゆう、あの命令がもう、あの小隊長のほうからも、命令がきつかつたんですよ。で大工さんは、あのけつきよくそのう、もう耐えきれなくなつてねえ、敵の様子をね、ちょっと見ようと思つて、あのグチャグチャのまんまでもつて、泥（どろ）をあのはいながら、あの土手の上行つてこう、敵の上をずうつとこう見て、わざか目の線だけですよ出したねえ。それをたつた十センチのぐらいの間隔でもつて一発ここへ食つちゃつたわけです。狙撃兵（そげきへい）のがうまいのいるんですよ。

死者の死にざまが、なぜこのように具体的に語られるのかという疑問も湧いてこようが、おそらく、ここには、多くの人の戦争伝聞が織り重なつて、こうした〈ハナシ〉にまとまつていつたと想像される。かつての禁忌の言い伝えを保証する〈ハナシ〉として、大工さんの戦死話が語り出されているわけで、重い機能を果たしている〈ハナシ〉といえよう。

### 三 市川民話の会の方法と「生活譚」

このような〈ハナシ〉を積極的に記録してきた、市川民話の会の方法をあえて言語化すると、「地域に暮らす会員が、地域で生活する時間の中で、知り合いなどを通じて出会つた人から、その人が話してくれる地域の話を聞く」という方法である」ということにならうか。

そして、こうした方法を、さらに有効に機能させてきたのが、

「生活譚」という枠組みだったと考える。

市川民話の会では、「生活に関する苦労話的話題」や「地域の暮らしぶりがうかがえる話」を「生活譚」という枠組みですくい上げていた。これは、従来の「昔話」「伝説」「世間話」という枠組みでは捉えきれない話をも、対象化できる道具立てであった。

「生活譚」については、これまでもいくつかの論考で取り上げ、また、他の研究者からも言及され、一定の意義を果たす概念になつていると思われる。<sup>(4)</sup>しかし、山田巣子氏からの批判にあるように、「生活譚」という概念が、「世間話」という枠組みとどのような相関関係にあるのかといった点が、未だ未整理であるといえよう。

一九九〇年以降、「世間話」研究の進展が図られ、現在の枠組みとしては、「生活譚」を広義の「世間話」の中に位置付けてもいいような状況にはなつてきている。だが、そうした中であつても、「世間話」「生活譚」「現代民話」「現代伝説」などの語感には、やはり異なるニュアンスが働いていると思われる。<sup>(5)</sup>

図の「民話まんだら」では、「ハナシ」という座標軸の中央に「世間話」を位置付け、〈カタリ〉に近いベクトルに「現代民話」、民話の枠外に「ライフヒストリー」を設定し、「生活譚」や「戦争体験」などを、「ライフヒストリー」と「現代民話」の境界線上にイメージ化してみた。「軍隊にまつわる話」は、「ライフヒストリー」や「現代民話」と近しい視点であると考える。

どのような角度から焦点を当てるかで、見えてくる世界は異なるであろうが、もちろんこれは、新しい分類やジャンル分けを提

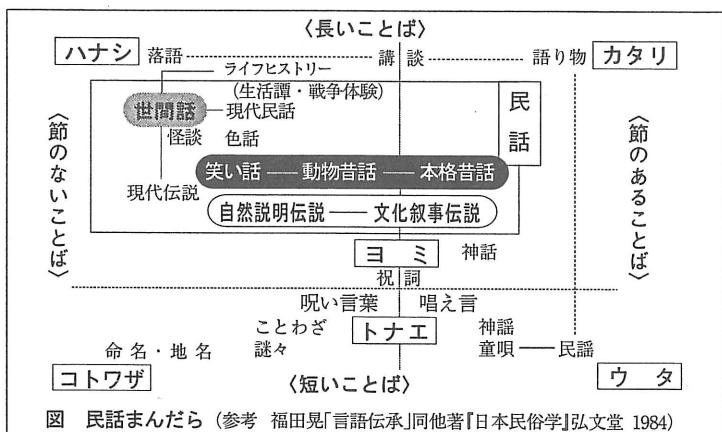


図 民話まんだら (参考 福田晃「言語伝承」同他著『日本民俗学』弘文堂 1984)

根岸「むかしむかしの話の中に…」  
(橋本裕之編著『目からウロコの民俗学』2002 PHPエディターズ・グループ)

ては、「口承記述面」とし

唱しようとするものではない。具体として展開する「口承」世界に、どのような光を当てれば有効に立ち頭れるかという観点から、資料の構築を目指していくことを提唱するものである。

研究の可能性が開けてくるであろうか。

内容面でいえば、「戦争話」への視点<sup>(7)</sup>

として、松谷みよ子『現代

話』<sup>(8)</sup>として、『現代

民話』を始めとする、話と

その産み出される力学を探

ろうとする研究を、更に深めていくこと

につながっていこう。

「文芸資料集」への視点<sup>(8)</sup>として、こうして聞けた話を、どのように

資料集としてまとめていくかという研究の視座が考えられる。

さらに確認しておきたい可能性は、近年の「記憶」をキーワードにした学問の問い直しとの重なりである。

「記憶」という問いは、「一つには、「戦争」「軍隊」という過去の出来事が、どう記憶され、それがどうハナシとして表象化されるか」ということだが、近年の「記憶」論は、岩本通弥氏によれば、聞き書きの場が、言葉にならなかつた記憶を対話を通じて物語化させる、いわば「生成の場である」という捉え方を持ち、更に、今や「記憶と一体化した歴史」は衰退し、自らが記憶に値するものをモニュメントや記録といった物質的な「記憶の場」に外在化される時代であると捉えていることである。<sup>(9)</sup>

市川民話の会という市民団体が、「軍隊にまつわる話」を語つてもらい、それを資料集として記録する。そして、その話を意味あるものと位置付ける。この一連の流れそのものが、近年の「記憶」論と直結する営みであるといえる。そしてそれは、「口承文芸の発生と創造」<sup>(10)</sup>というテーマともつながっていくものであろう。

このように見てくると、『市川の伝承民話』における「軍隊にまつわる話」という窓は、「口承文芸」研究を軸足としながらも、「世間話」「生活譚」といった枠組みの問い直しを迫り、「口承文芸」研究だけにとどまらない可能性を持つているものと考えられるのである。<sup>(12)</sup>

注

(1) 『荷風全集第24巻』一九八〇 岩波書店

(2) 『市川市史第三・四巻』一九七五 市川市、武井順一『市

川市国府台における砲兵隊・工兵隊の記録』一九九七 市立市

川歴史博物館 ほか参照

(3) 拙稿「市川民話の会編『市川の伝承民話』—「生活譚」の展開と可能性を中心に—」『昔話伝説研究』17 一九九三、

拙稿「市川の伝承民話」の編集に携わつて—資料集を(編む)こと及び「世間話」「生活譚」のことなど—』『世間話研究』4 一九九三、拙稿「民俗採訪」における口承文芸の記述方法—世間話研究との関わりから—』『世間話研究』7 一九九七、拙稿「生活譚」提唱時の「世間話観」『世間話研究』8 一九九八

(4) 小池淳一「世間話と伝承」「境界とコミュニケーション」

一九九五 弘前大学人文学部人文学科特定研究事務局、常光徹「世間話について」『川崎の世間話』一九九六 川崎市市民ミュージアム、野村典彦「仲間内の「あの話」」「世間話研究』7 一九九七、山田巣子「世間話と聞き書きと」

『岩波講座日本文学史第17巻 口承文学2・アイヌ文学』

一九九七 岩波書店、山田巣子「生活譚」という「問い合わせ」

に向けて』『都留文科大学国文学論考』34 一九九八、山田巣子「『事実』を装う「はなし」—世間話・うわさ・生

- (5) 活譚」『〈口承〉研究の地平』二〇〇一 「〈口承〉研究の会  
大島広志「解説・現代伝説の立ち上げ」同他編著『幸福の  
Eメール』一九九九 白水社、松谷みよ子『現代の民話』二〇〇〇  
中央公論新社、島村恭則「日本の現代民話再考—韓国・  
中国との比較から」筑波大学民俗学研究室編『心意と信仰の  
民俗』二〇〇一 吉川弘文館、『語りの世界 特集 パーツ  
ナル・ストーリー』36 二〇〇三 語り手たちの会 ほか
- (6) 描稿「むかしむかしの話の中に…」橋本裕之編著『目か  
らウロコの民俗学』二〇〇二 P.H.P.エディターズ・グ  
ループ
- (7) 松谷みよ子『現代民話考』(軍隊 一九八五) (銃後  
一九八七) 立風書房、松山巖『うわざの遠近法』一九九三  
青土社、野村純一「危険な話群—『断腸亭日乗』から」  
一九八四『日本の世間話』一九九五 東京書籍、佐藤健  
二「民話の抵抗力—戦時下のうわざについて」一九八七  
『流言蜚語』一九九五 有信堂、重信幸彦『銃後の美談  
から—総力戦下の「世間」話・序説』『口承文藝研究』23  
二〇〇〇、描稿「村の草分けの話」そして『戦争話』『世  
間話研究』12 二〇〇二、川村邦光編著『戦死者のゆく  
え語りと表象から』二〇〇三 青弓社ほか
- (8) 小平民話の会編『小平ちよつと昔』一九九八 小平郷土  
研究会の「歴史事件・世相の話」の項、行徳昔話の会『行  
徳昔語り』二〇〇〇 明光企画の「戦争」の項、『富浦町  
のはなし—千葉県安房郡富浦町〈口承〉資料集』二〇〇〇  
二 國學院大學説話研究会の「明治の話・震災の話・戰  
争の話」の項ほか
- (9) 小松和彦編『記憶する民俗社会』二〇〇〇 人文書院  
香月洋一郎『記憶すること・記録すること』二〇〇一  
弘文館、岩本通弥編『現代民俗誌の地平3 記憶』二〇〇〇  
○三 朝倉書店ほか
- (10) 岩本通弥「方法としての記憶—民俗学におけるその位相  
と可能性」同編『現代民俗誌の地平3 記憶』二〇〇三  
朝倉書店
- (11) 二〇〇四年度第二八回日本口承文藝学会大会シンポジウ  
ム(二〇〇四・六・六 和洋女子大学)のテーマ。本誌所  
収論考参照
- (12) 山田巣子「〈口承〉—〈口承〉研究の展開」『日本民俗学』  
239 二〇〇四是、本稿と重なる動向を示唆する
- 付記
- 本稿は、二〇〇四年度第二八回日本口承文藝学会大会研究発  
表(二〇〇四年六月六日 和洋女子大学)を元に成稿したもの  
である。席上、小池淳一氏より、「生活譚」を「〈口承文芸〉や〈ハ  
ナシ〉の枠に止まることなく、広く人文社会科学の地平に切り  
込む概念として位置付けていくことが必要ではないかとの指摘  
をいただいたが、本稿で充分に展開することができなかつた。  
(ねぎし・ひでゆき／市川市中央図書館)